

A- PET カップで思い出すこと

SOLO CUP（ソロカップ）の項で A-PET カップのことに少し触れましたが、私が SOLO 製品を扱い始めた 1998 年頃の国内では、製造しているメーカーはほとんどありませんでした。多くのメーカーが PS（ポリスチレン）製の透明カップは製造していましたが、形状は胴に蛇腹があり、押すとペコペコするカップでした。それでも透明というだけで人気があり、業務用から家庭用までたくさん使われていたのです。当然大手カップメーカーも販売していましたが、外部メーカーの OEM 製品が大半でした。そこにスターバックスと共に、SOLO の頑丈な A-PET カップが登場したのです。輸入販売をしてみると、出展したホテルレストランショーには本当に多くの業界人が訪れてくださり、販売数量が瞬間に増えました。一つの理由は、厚紙カップや A-PET カップが国内で製造されていなかったからだったでしょう。

コーヒービジネスの基幹商品として位置付けたデュニコンビカップを販売する中で、早くからインサートカップの不良品には悩まされました。その都度 DUNI 社に申し入れましたが不良品によるクレームの発生は避けられず、国産の可能性を探っていました。その際に知人から紹介された竹内産業株式会社を視察し、PS カップ製造ラインが数ラインあること、一部は既に「レジン→シート押し出し→カップ成型→包装」がインライン化されていることを知りました。もちろん仕入シートのコストや品質を問題と考える場合には、原反シートの内製は理想ですが、押し出しから包装までをインライン化するには、長い製造ラインが必要となります。それには工場の立地や用地の確保、工場建屋や 1 ラインで数億円という設備投資の他にも多くの難問が山積します。当時の竹内産業はその将来構想の中で、既に新工場用地の確保を進めているとの説明もありました。規模は中小企業ですが、ここまで先取の姿勢を備えた会社を知りませんでした。こうして知り合い、信頼できる会社でコンビインサートカップの国内製造を始めました。その際少しだけ型をいじりました。容量を 10 cc ほど増やし、80φ のリッドに合わせました。これでトラベラーリッドが使えます。

また SOLO カップの国内販売が順調に進む中で、思いがけずに海外からの売り込みがありました。それは台湾の新興企業が A-PET カップの製造を始め、日本で販売して欲しいという内容でした。最初は何も情報がなく、何度かメールのやり取りをしていましたが、担当者の来日時に会うことにしました。この会社が台南の CHEERS CUP です。品質に満足できない中での取引はできないので、その後何度も工場に出向き、要望し、確認し、議論し、何とか初回のコンテナを組んだのですが、やはり品質問題にぶつかりました。その原因は台湾国内で調達する PET シートにありました。どうしても小さな気泡や不純物の混入が避けられないのです。国内製造の可能性を探ったときに、やはり竹内産業が思い当りました。しかし深絞りにはドイツイリヒ社の成型機が最適ですが、日本国内にもある他社の製造ラインを見学することは不可能です。ライバルに製造情報を公開する会社は無いのです。成型機 1 台あたりで数億円にもなる投資を、やみくもに進めることはできません。できることは一つ、台南の CHEERS に頼んで見せてもらうことでした。こうして竹内産業の営業と現場技術者同行の 2 泊 3 日の旅となりました。イリヒの成型機を中心とした製造ラインや金型などの写真をたくさん撮影し、操作をつぶさに見て質問し、製品を手にとった経験は得難いものだったでしょう。こうして日本国内で有力な、しかも独立した企業による A-PET カップの製造が始まりました。それまでも小さな金型（2～6 面付）で製造が始まっていましたが、イリヒの大きな金型で製造するハイスピードの生

産ラインは、量産化が可能で、市場ニーズに応えられるものです。製品化に当たってはグローバルスタンダードの口径78φ、92φ、98φの採用をお願いし、当時在籍していたの会社で直ぐに扱い始めました。

大きな投資をした竹内産業には、販売量を増やして欲しいとの思いから、アートナップ社を紹介もしました。現在もリサイクルペットカップとしてコンシューマー製品の製造が続いています。

そして CHEERS カップは、何度かの輸入の後に品質問題が解消されず、国内販売は終わりました。

カフェグッズは昨年の中頃から竹内産業の TAPS カップを正式に扱い始めました。これはお世話になったカフェグッズに、このカップを改めて売って欲しいとの要望をいただいたことが理由です。実はさらに大きな理由として、輸入規制が厳しさを増す日本国内向けの食品容器は、リサイクル原料の認可がいつ断たれるかという不安からです。一例ですが、リサイクルペットカップはリサイクルされた回収 PET 層を両面バージン PET 層でサンドイッチして製品にします。これはリサイクル原料層が直接食品に触れないこと、という規制のためですが、果たして 100%安全かと証明するためには溶出試験を繰り返すしかありません。その煩雑さに海外メーカーが日本向け輸出を躊躇う可能性があります。

また現地の状況ですが、諸外国は日本に比べてリユースへの関心が高くありません。PET ボトルの回収は水洗いしてキャップを外して、が常識の日本と、小遣い稼ぎに拾い集める環境とは大きく異なります。安定して潤沢に原料が調達できなければ、製造に悪影響を及ぼすことは避けられない。今のコロナ禍はどこで何が起こるか判らない状況が蔓延しています。



昨年久しぶりにお会いした竹内産業のS部長は取締役になっていました。彼からの要望でもあり、TAPS カップを正式に扱い始めたカフェグッズですが、状況によってはこれからも国内回帰を進めることがあるでしょう。余りにも経済の力関係が厳しさを増す日本で、出来る最善を考えて進みたいと思っています。尚 TAPS カップはリサイクルペットカップですが、リサイクル原料は 100% ボトラーズの回収 PET ボトルだということです。品質も供給力も確かです。